

2020年(令和2年)4月30日

小学校1年生の保護者の皆様へ

福山市教育委員会
教育長 三好 雅章

平素から本市教育の充実に向けて、格別の御理解、御協力をいただいておりますことに、厚くお礼申し上げます。

皆様には、入学早々に、子どもたちの学校生活を中断せざるを得ない状況になり、心配になられることもたくさんおありのことと思います。

各学校においては、引き続き、1年生に応じた課題、プリント等を工夫したり、メッセージを伝えたりするなど、学校再開のときに、子どもたちが安心して登校できるよう、取り組んでまいります。御理解、御協力の程、よろしくお願いいたします。

先日、『6は、1といくつ?』『8は、3といくつ?』という算数の学習で、子どもが指を使って答えを求めている。大丈夫なのだろうか。」という保護者の方の声を聞きました。指を使って答えを求めることを覚えてしまったら、それが習慣化してしまうのではないかと、心配されたようです。

大切にしたいことは、「自分でできる方法」で考えて、やってみることです。

子どもたちは、これまでの遊びや生活の中で、数や言葉に触れ、使い、たくさんのお話を学んできています。何か、新しいことに出会ったとき、子どもなりに持っている知識や経験を結びつけながら考えています。先生や大人が、一方的にやり方を教えても、必ずしも、できる、分かるとは限りません。

自分なりにやってみて、納得していくことが、とても大切です。

これは、算数だけではありません。教科書を開けば、学校で学習していなくても、自分でやってみたくすることがたくさんあると思います。生活の中にも、子どもたちの「知りたい。」「やってみたい。」が、いっぱいです。

お子さんが、自分で考えて、自分でやってみようとしている意欲を、是非、大切にしてください。

そして、子どもたちが、楽しみながら言葉と数の感覚を豊かにする問いや活動の事例をまとめました。是非、ご家庭で、チャレンジしてみてください。

また、教育委員会ホームページに、1年生の学習で使えるプリントなどを掲載しています。併せて、ご利用ください。

人は誰もが「自分で学ぶ力」を持っている。そのことをもっともストレートに教えてくれるのが、子どもの母語の学習である。子どもは母語を学習するとき、文法や語彙を親や先生に直接教えてもらうことはない。そもそも言語を知らない子どもに言語を直接教えることは不可能なのだ。子どもは耳に入ってく一つ一つのことばの意味を自分で推測し、ことばを繋いで文を組み立てる規則(つまり、文法)を自分で見つけ出す。子どもが母語を学習するときに発揮する能力は、まさに「自分で問題を発見し、考え、解決策を自分で見つける」という「学習力」そのものである。「主体的な学び」が教育現場でキーワードになっている昨今、子どもの母語の学習の仕組みを理解することは、「自ら学ぶ力」がどういうものなのかを私たちが考える上で、大きなヒントをくれるはずだ。

〔「学びとは何か ～(探究人)になるために～」(※今井むつみ 著)から引用〕

※ 今井むつみ先生は、慶応義塾大学教授であり、認知科学、言語心理学、発達心理学研究の第一人者です。広島県教育委員会の外部有識者として、「乳幼児期の教育・保育を考える会」のメンバー、広島叡智学園のアカデミックアドバイザー等に就任されています。

本市においても、一昨年から「福山100NEN教育」の取組に指導・助言をいただいております。福山市教育フォーラムを始め、市内教職員研修・校内研修等においても、講師として指導していただいております。

上記の著書の他にも、『ことばと思考』(岩波新書)、『新人が学ぶということー認知科学論からの視点』(北樹出版)、『親子で育てる『ことば力と思考力』(筑摩書房)など、多数執筆されています。